

# カエルがゆくと ここの人に 会いたい

地域日本語教育の現場から



今回は、  
富山県富山市の  
中河さん

第 ⑤ 回

地域日本語教育の現場には、多文化共生の最前線で活躍する  
アツい人たちがたくさんいます。

異文化がぶつかり合う中で、もみくちゃになりながらそれを楽しみ、  
人と人を結び付け、地域社会を担う柱となる——。

そんな魅力的な人と、その人が関わる事業について、  
好奇心旺盛なカエルが話を聞きに出掛けました。

取材・文＝編集部 イラスト＝野村俊夫

今回の「この人」

## 中河和子さん

トヤマ・ヤポニカ 代表取締役

考え続けていることは  
「地域日本語教育の  
専門性とは何か、です」



### カエル 中河さんが、日本語教育に関わりだしたのはいつ？

1991年に、トヤマ・ヤポニカの日本語教師養成講座を受けてからです。

私は、東京の大学で国文学を専攻し、卒業後は企業に就職しました。でも、当時、企業での女性の職といえば一般職で、結婚までの腰掛けです。女性のそのような働き方に、疑問を持っていました。数年間、東京の企業で働いた後、結婚して、生まれ育った富山に戻ったのが、ちょうど90年ごろ。結婚しても働こうと思っていたので、富山で仕事を探すときに考えたんです。企業に就職しても、どうせまた一般職しかない。だったら違うことをやったほうがいいんじゃないか……。

### カエル それが日本語教師だったの？

そうですね。自分としては、一つの挑戦でもあったんですけど。

日本語教師という職業の存在は、学生時代から知ってはいましたが、経済的に自立するのは難しいと思い、仕事としては考えていませんでした。

でも、80年代～90年代にかけて、富山県には、日本人の配偶者や技術研修生としてやってくる、アジア出身の外国人が増えていました。富山に戻ってから、ジェンダーに関する市民活動に参加していたのですが、そこで、DVや姑問題など、深刻な問題を抱えたフィリピン人妻たちと、日常的に接していたんです。

彼女たちのような「生活者」のための日本語教育を担っていたのが、主婦を中心とした、ボランティア講師でした。女性の、特に高学歴である主婦の能力が、余剰能力と見なされ、安価に使われていると感じました。この構造を何とか変えてやろうと思ったのが、私の挑戦です。

### カエル わあ。迫力があって、たじたじしちゃうな。

でも、日本語教育が職業として成り立ちにくいのは、事実かも。

日本語教育が、社会的に必要なのであれば、専門職として、きちんと対価を得て行うべきだ、と思うんです。それをや

らないことは、日本語教育を<sup>なりかい</sup>生業として  
いる仲間や、日本語教育界全体への裏切りだ、くらいに、当時は考えていました。



### だから、ヤポニカを 企業化したんだね。

はい。主な収入源は、高等教育機関での授業、企業の外国人社員などの研修や、自治体への講師派遣などです。

いわゆる「生活者」のための日本語教育については、公的保障として、行政にお金を出してもらう必要があると考えています。教室をコーディネートしたり、学習活動を促進したりするのは、本来、対価を得てやるべき専門的な仕事です。

幸い、県の「とやま国際センター」には、熱心なプロパーの方がいらっしゃって、そこと連携して、地域の日本語教室をいくつかコーディネートできています。



### そっかー。ヤポニカは うまくいってるんだね。

経営的にはいつもとても大変です。幸いこの仕事が好きで、共に苦勞してくれるスタッフに恵まれて、何とかやっています。また、個人的にも、行き詰まったことがありました。ボランティア養成講座で「教え方」をやっていて、自分は市民ボランティアのいい芽を潰して、皆をミニチュア日本語教師化しているんじゃないかと。その他さまざま自分の勉強に行き詰まりを感じ、2000年に、お茶の水女子大学の院に入りました。

そこの実習は「日本人が一方向的に教えるのではなく、外国人と日本人が対等の立場で対話するクラス」でした。この実習が私に大きな影響を与えたのは事実です。ただ、私が「教えないボランティア」を模索したのは、学生時代参加していた精神医療ボランティア活動での「支援者・被支援者の関係性」「非専門職の良さ」「活動の雰囲気」によるところも大きいと思います。その模索を具体化してく

## カエルがまとめた 外国人と日本語教育を取り巻く ざっくり年表

- 1972 ●中国残留邦人帰国開始  
83年には、中国帰国者定着促進センターが開設され、日本語教育が行われた
- 1977 ●(社)日本語教育学会設立
- 1980 ●インドシナ難民の受け入れ開始  
東京・神奈川・兵庫に定住促進センターが  
つくられ、日本語教育が行われた
- 1980 ●「ジャバゆきさん」社会現象  
年代 農村花嫁がやってくるようになる
- 1983 ●留学生10万人計画  
中曽根内閣の時、国策として策定され、  
2003年に達成された
- 1984 ●日本語能力試験開始
- 1988 ●上海事件  
日本の日本語学校に留学を希望した学生が、授業料を払ったにもかかわらず、ビザが発給されなかったため、  
在上海日本領事館に抗議行動が起こされた
- 1989 ●日本語教育能力検定試験開始
- 1990 ●改正入管法の施行  
この改正により「定住者」ビザが創設され、事実上、  
日系人などが日本で単純労働することを合法化した。  
これにより、デカセギとして多くの外国人が来日し、  
その後の定住化につながっていく
- 1990 ●日本語教育振興協会設立  
88年の上海事件を受け、日本語学校の適正を  
審査する機関として設立された
- 2001 ●第1回外国人集住都市会議開催
- 2002 ●日本留学試験開始
- 2005 ●外国人登録者数200万人突破
- 2006 ●総務省「多文化共生推進プラン」策定
- 2007 ●経団連「外国人材受入問題に関する第二次提言」発表
- 2008 ●留学生30万人計画  
●EPA(経済連携協定)で1回目の看護師・  
介護福祉士候補生が来日

れたのが大学院の実習でした。

この実習が原点となって、「コーディネーターがいて、外国人と日本人がパートナーとして対話する中で、相互理解が進み、問題解決が図られ、日本語も習得していく」という、今のヤポニカの地域日本語教室の形態が確立されていきました。



### へえー。ヤポニカの 地域日本語教室に 興味が湧いてきたよ。



中河さんが関わる

## トヤマ・ヤポニカ

多 岐 D A T A

1990年3月設立。93年から、法人として活動。活動内容は、1. 外国人に対する日本語教育 2. 日本語教師養成 3. 日本語支援ボランティア養成と地域日本語支援教室コーディネーター 4. 研究活動（日本語教育学会などでの発表・論文発表など） 5. 外部講師によるスタッフの研修 6. 日本語教育の普及活動と多岐にわたる。

### 外国人と日本人が、お互いを理解するための場を目指して

「トヤマ・ヤポニカ」が、普通の日本語教育機関と違うのは、日本語教育機関でありながら、同時に、地域の日本語教育も担っている、というところだ。教室のコーディネーターはもちろん、ボランティア養成講座なども行っている。

トヤマ・ヤポニカが最初の地域日本語教室を立ち上げたのは2004年。代表の中河さんが、お茶の水女子大学大学院で得た経験から、「相互学習型」の教室実現を目指して始まった。しかし、そもそもの始まりは、教室自体ではなく、富山県の「とやま国際センター」と連携した、ボランティア養成講座だった。

「それまで養成講座では、文型の教え方を中心にやってきましたが、他のやり方を模索する必要があるんじゃないかと思

いました。ボランティアさんのいろいろな面を生かせていない、という思いに加えて、「教える関係の固定化」がいやでした。またその教え方が、非常に多様な地域の学習者には合わないことも多い。何より、『限られた文型だけ、楽しく教えればいい』といっても、『いざやろうとすると、難しくてできない』と、活動するボランティアさんが増えないのも悩みでした。

外国人と日本人がパートナーとなり、日本語で対話を重ねることによって、相互理解と日本語学習が進む、『相互学習型』を目指す養成講座をやってみたい、と、とやま国際センターの担当の方に言いました」と、中河さんは語る。「でも、相互学習型って、養成講座だけではダメで、これは教室もつくるしかない。教室をつくるプログラムもやろう、というこ

対話のテーマには、「嫁・姑問題」なんてのもあるよ。まさに生活密着だね。



「ワイワイにほんご・たいこうやま」の活動の様子。この日のテーマは「朝食で食べたもの」だ。中央には、「果物」「野菜」などのカテゴリ別に、食材の写真が並ぶ。教室では、毎回、進行役の下、1つのテーマで対話活動をする。日本人と外国人がペアを組み、互いに対話を楽しむ、全体の一体感もある。



とになりました」

ヤポニカが立ち上げた教室の一つに、2006年から射水市で活動を始めた「ワイワイにほんごたいこうやま」がある。ここで、リーダー的な存在として活躍する亀井あつ子さんは「私たちは、日本語教育を通じて、地域づくりをやっていると思っていますんです」と語る。

教室を始めて1年ほどたったときのこと。活動場所である公民館で、他の団体の日本人が携帯電話を置き忘れ、それが紛失してしまった、ということがあった。日本語教室に通うために公民館に出入りしていた外国人を疑う雰囲気<sup>きんぎ</sup>が、広がった。亀井さんは、誤解を解くために、公民館の人と何度も話をしたが、これがきっかけで、コミュニケーションの重要性を改めて感じた、と言う。「まずは、そこにいる日本人と顔見知りになっておくことが第一歩だと思いました。公民館の受付の人はもちろん、ロビーにいる人、公民館を利用する他の団体の人にも、自分から積極的に挨拶<sup>かいぼう</sup>し、声掛けをしていくように、外国人にも話をしました」

中河さんは言う。「私たちの役割は、教室を立ち上げることに、教室を継続していけるように、その後のサポートをしていくことです。そのためには、行政とうまく連携していくことも必要ですが、市や県のことを、私たちは信頼しています。富山県は、県内に日本語教室を立ち上げたら、1年間は毎年、2年目以降は年に12回程度、その教室のサポートに行かせてくれます。きっちり私たちを雇って、行かせてくれるんです」。もちろん、県や市が、中河さんたちの活動を理解してくれている背景には、中河さんたちが積極的に県内の状況や、必要なことを訴え続けてきた、という経緯がある\*。

これまでにヤポニカが立ち上げた、「にほんご広場inなんと」「日本語教室in黒

部」のボランティアたちは、口を揃えて言う。「何か問題があれば、ヤポニカが相談に乗ってくれる、という安心感があります」「『相互学習型』というのもいいですね。同じことを、言葉を変えて何度も話すことにより、日本語もわかっていく。生きたコミュニケーションが生まれ、お互いに理解し合うことができます」

ヤポニカは、文化庁の委託を受けるなどして、ボランティアのブラッシュアップ講座を開き、コーディネーター的な役割を担える人材の育成にも力を入れている。富山では、民間団体、行政、現場のボランティアという三者の、信頼関係に基づく日本語教育が、実践されていた。

※『月刊日本語』11月号特集「地域の声を政治家に届ける」参照



ヤポニカでは  
『しゃべらんまいけ』という  
教材も作ってて、  
これが対話のネタに  
なってるんだって

中河さんか

地域に関われば関わるほど、地域日本語教育の専門性は、広く深いものだと実感しています。その専門性の内容を明らかにした上で、専門性を持った人が正当な対価を得て、安定的に仕事ができる社会になるべきだと強く思っています。

